

高等部総合的な学習の時間の取り組み②

—— 外国新発見！日本再発見！ ——

渡 邊 鮎 美*・廣 木 聡*・椎 名 幸 由 紀*・東 條 吉 邦**

(2014年9月16日受理)

Integrated Study in a Special High School for Students with Intellectual Disabilities,
Part 2: Discover Foreign Countries and Rediscover Japan!

Ayumi WATANABE, Satoshi HIROKI, Sayuki SHIINA and Yoshikuni TOJO

キーワード：特別支援学校高等部，総合的な学習の時間，授業づくり，異文化交流

急速に社会が変化する中，幅広い知識と柔軟な思考力に基づいて判断することや，他者と切磋琢磨しつつ異なる文化や歴史に立脚する人々との共存など，変化に対応する能力や資質が求められている。新学習指導要領では「言語活動の充実」が明記され，思考力・判断力・表現力等を育み，主体的に学習に取り組む態度を養うことの重要性が述べられている¹⁾。研究を通して，一人一人の“感じる”を大切に，自ら考え，思いや考えを伝え合いながら，子どもたちが生き生きと活動し，成長していくことができる授業づくりにせまっていきたいと考える。

高等部で行う総合的な学習の時間の授業の中で，外国の音楽や料理に触れる体験を通して異文化を感じることで，「日本のことも調べたい」「調べたことを伝えたい。」という思いを引き出すことにつながるような取り組みを考える。さらに自分たちの可能性に気づき，自分にできることを考え，誰かの役に立ちたいという思いにつなげられるような授業づくりと，評価の在り方について実践，研究を行った。

はじめに

茨城大学教育学部附属特別支援学校では，昨年度から「感じる・考える・伝え合う 授業づくり」というテーマで授業づくりの実践研究に取り組んでいる。総合的な学習の時間では，学校や生徒の実態に応じて教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習ができる²⁾。その実践を通して研究テーマに迫りたいと考え，昨年度の高等部では研究対象の授業を総合的な学習の時間とした。

昨年度の高等部の在籍生徒数は，22名である。内9名が小学部から本校に在籍する生徒，8

*茨城大学教育学部附属特別支援学校 **茨城大学教育学部

名が中学部、5名が高等部から本校に入学した生徒である。また、8名の生徒が自閉症及び自閉的傾向を併せ有する。さらに、てんかんや肢体不自由を併せ有する生徒も3名在籍する。

全体での指示を聞いて活動する生徒、教師とのかかわりをとおして活動する生徒など、実態は様々である。素直な明るい生徒が多いが、指示を待っていることが多く、自分から問題を発見して解決していこうとする気持ちを育てることが課題である。高等部で行う総合的な学習の時間の授業の中で、外国の音楽や料理に触れる体験を通して異文化を感じることで、「日本のことも調べたい。」「調べたことを伝えたい。」という思いを引き出すことにつながるような取り組みを考える。さらに自分たちの可能性に気づき、自分にできることを考え、誰かの役に立ちたいという思いにつながられるような授業づくりと、評価の在り方について実践、研究を行った。

総合的な学習の時間について

一昨年まで行っていたキャリア教育の研究を通して、生徒のキャリア発達を育むために「人を意識できるような場面設定、実感を伴った学習場面の設定、自分で活動を振り返ることができる状況設定」の大切さが分かった。周りの人とのかかわり、実際の体験的な活動を伴いながら学習できることや自分の取り組みを振り返ることができるような状況づくりを設定して経験を積み重ねることの必要性を感じた。

そこで、「感じる・考える・伝え合う 授業づくり」というテーマを受けて、高等部では「五感を使って感じることでできる体験活動を取り入れられること」「生徒たちの学習の取り組みから柔軟に学習展開や内容を変化させて取り組めるもの」で実践をしたいと考えた。総合的な学習の時間では、学校の歴史を調べることや教員へのインタビューを行って学校新聞を作ったり、自分たちの居住地について理解を深めるためにゆるキャラを調べ、特色を発表し合ったりする学習を行ってきた。また、自分たちの学校を地域や近隣の方々にもアピールできるような学校のオリジナルキャラクター作成に挑戦するなど、生徒の興味・関心が高く、自主的に発言する姿が見られ、互いの活動が学びにつながるような活動を行ってきた³⁾ことを受け、より研究テーマに迫りたいと考え、総合的な学習の時間で実践を進めることにした。

総合的な学習の時間での授業づくりを行う際に、高等学校学習指導要領解説⁴⁾や「今求められる力を高める総合的な学習の展開(高等学校編)」⁵⁾、『障害児教育の「総合的な学習の時間」』⁶⁾、『特別支援教育の「総合的な学習の時間」－実践撰集－』⁷⁾等の読み合い、他の学校の総合的な学習の時間の実践資料を集める、他の教科との違いを整理する等、共通理解を図った。

「外国新発見！日本再発見！」の実践について

高等部では総合的な学習の時間を「はあとタイム」と呼んで学習を行ってきた。自分たちが実際に見たり、聞いたり、触ったりするといった、五感を使って「感じる」体験を通して新た

な気づきを促し、自分たちができることを「考え」、分かったことや気づきを周りの人と「伝え合うこと」ができる姿を引き出すテーマとして、異文化交流を考えた。異文化を感じる授業を行うにあたり、実際に外国の方と直接触れ合う体験をしたいと考え、一昨年度一緒に学習活動をしたことがある附属小学校のALTでガーナ出身の先生をお招きした。実際に外国の方と触れ合い、共に活動することは生徒たちにとって一番の学びや気づきにつながり、外国を肌で感じる良い機会になると考えた。

グループを学部縦割りで編成し、部の全員で取り組んだ理由は、学年の枠を越えて共に活動することでリードする先輩の姿を見ることや、様々な新しい発想を聞いて自分の考えにつなげること、自分から発言したり積極的に活動したりできない生徒も、できることや得意なことを生かして役割分担することで、どの生徒も協力して活動することができると思ったためである。そして、講師の附属小学校ALTを交えての授業では、ガーナの太鼓や鳴子等の楽器に実際に触れ、音や振動を肌で感じるなど、心を揺さぶるような体験活動を行うようにした。また、外国の料理を知るとい授業では現地のオイルを使った調理活動を通して、味や香りを感じ、日本の料理との違いや共通点を考えられるようにした(図1)。このように、グループごとの学びを深める時間と、学部全体で感じ合ったことを共有できる時間を組み合わせて授業を積み重ねた(図2、図3、図4、図5、図6)。



図1 調理活動



図2 グループ発表場面①

外国と日本の文化を改めて知るにあたり、教員の予想としては、「スポーツ」「料理」「音楽」が候補に挙がると考えており、初めは音楽や調理を中心に学習を進める予定であった。しかし、実際に子どもたちが自分で「調べてみたい」と感じたものについて意見をまとめたところ、「料理」「遊び」「日本の名所や観光地の紹介」「行事や特色などの文化的なもの」という項目が挙がった。そこで、「料理・遊びグループ」「日本紹介グループ」「文化グループ」という3つのグループに分かれ、それぞれの学びを深める調べ学習の時間を設けた。



図3 グループ発表場面②



図4 日本のお茶紹介



図5 グループ発表場面③

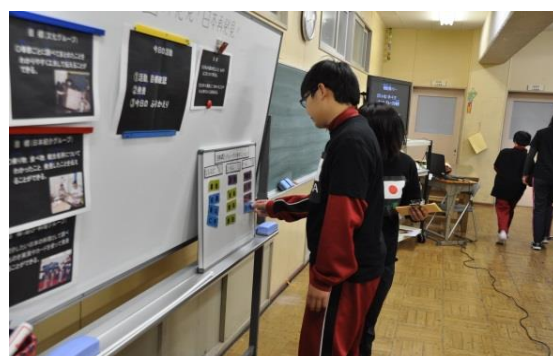


図6 振り返り場面

また、授業を進めるポイントとしては、生徒自身が課題を見付け自ら取り組むことを大切にすることである。実際、教員が生徒の反応を予想して初めに授業計画を立てていたが、生徒たちの様子やつぶやきをさらに大切にすることを意識し、計画を随時変更しながら授業づくりを進めてきた。外国の文化について知るうちに、生徒からは「附属小学校ALTに日本のことを紹介したい。」「外国のことをもっと知りたい。」「こんなことをしてみたい。」という積極的な発言が出るようになってきた。そこで授業内容を組み直して柔軟に学習が進められるようにした。

評価について

自分たちの取り組みや互いの活動を評価し合える取り組み、生徒の変化を評価するものとして、今年度は「学習シート（個人の自己評価）（図7）」、「いいな！ボード（グループ相互評価）（図8、図9、図10）」、「エピソード記述」を使用した。実践の中で評価をどのようにするか話し合った結果、ポートフォリオ評価を用いて毎回の授業の取り組みを積み重ねられるようにすること、いつでも振り返ることができるようなもの考えた。

学習シートは、一人一人自分の取り組みを見つめ直すものとして「学習シート」への記

入を取り入れた。これは、自分の目標や活動内容を書き、授業の最後に振り返った内容を書くようにした。振り返りの欄は生徒によって自分の言葉で書いたり、取り組みの様子を表したシールを貼ったり、実態によって方法を変えた。また、繰り返し使えて、短時間で使えるように改善しながら工夫した。

「いいな！ボード」は、グループごとの発表で互いの発表を聞いた後、周りの教師と話し合っ「分かったこと」「発表の良いところ」について「いいな！」というグッドサインマークのイラストの個数（1～3個）（図8）や表情イラストカード（図9）で意見を示し、発表したグループに見せることで互いに評価し合えるようにした。しかし、使っていく中で「項目が分かりづらい」「もっと分かったことや気づきを伝え合うものにしたい」という意見が出てきたことを受け、

改善を重ねてより使いやすいものにした。項目も変更し、「なるほど」「質問」「うーん（分かりづらい）」という3点を設けることで、単なる情報の伝達にとどまらず、また、発表を聞くだけでなく、日本と外国を比較して感心したことや分かったことを明確にすることや、「もっと詳しく知りたい。」「ここはどうなっているのか。」と感じた新たな疑問を意見として取り上げられるものにした。（図10）そうすることで、より理解を深められるようにしたいと考えた。

外国新発見！日本再発見！学習シート②			
名前： _____			
時間	日時	学習内容	振り返り <small>（感じたこと、思ったこと、気づいたこと、 がんばったこと、わかったこと）</small>
8	11/28 ()	日本のことを 伝えよう []	
9	12/4 ()	日本のことを 伝えよう []	
10	12/10 ()	日本のことを 伝えよう []	
11	12/19 ()	日本のことを 伝えよう []	

図7 学習シート



図8 いいな！ボード①



図9 いいな！ボード②



図10 いいな！ボード③

エピソード記述は、実践の振り返りとして、昨年度までの研究で活用してきた「エピソード記述」を用いることにした。これは、「感じる・考える・伝え合う」というテーマを受けて生徒の表情や様子、発言からどのように感じ、考えたのかを教師が読み取り、その変化を追って質的に評価する必要があると考えたためである。3つのグループの中で、それぞれ一人ずつ対象を決めた。その際、五感を使った実際の体験から感じる段階の生徒、感じたことをうまく言葉では表現できないが自分なりの感じ方をして考えている生徒、自分の表現ではあるが言葉で思ったことを伝えようとする生徒として視点を分けて一人ずつ取り上げた。授業後にグループの教員同士で様子を伝え合い、記録を積み重ねることで次時の教師のかかわりや支援の手立てを

考えられることができた。内容としては生徒自身の実態のベースとなる背景、授業中の実際の行動や様子の事実（エピソード）、エピソードから読み取れる気持ちや感じたことの変容の3点で記録を重ねてきた。

まとめと今後の課題

実践を重ねてきて、PDCAサイクルで授業実践を積み重ねることの大切さを感じた。毎回、授業後に取り組みを振り返ると、必ず改善点が挙げられた。座席の位置、時間配分、発表の仕方など、工夫や改善を行った。また、生徒の自主的な活動を十分に引き出せない時には支援の手立ての工夫を話し合い、アイデアを出し合うことで次時の支援につなげることができた。

また、体験的な活動を取り入れ、授業の中に驚きや感動の瞬間をつくることも有効であった。今回の授業では、音や振動、味などの五感に訴える要素を多く含んだ体験的な学習を取り入れることで、十分に「感じる」ことができたと考える。感じることから日本と外国の共通点、違いについて考えることにつなげることができた。また、分かったことや気付いたことをまとめ発表する活動を取り入れることで、自分たちの調べたことが他の人に伝わる喜び、新しく発見したことをぜひ伝えたい、という気持ちを引き出すことができたと考える。

そして、評価の工夫である。自己評価、相互評価、質的な評価を組み合わせることで、教師が多面的に変化を追うことができるようになった。また、生徒自身が十分に自分の取り組みについて振り返ったり、グループとして評価を受けたりすることでグループのメンバー同士での協力につなげることができたと考える。

最後に、外国への意識の広がりがあったと感じる。取り組みを通じて、自分たちの身近な生活の中にある外国の要素に気付くこと、自分たちが住んでいる日本について改めて理解が深まったこと、外国での出来事に関心を向けて話題にする様子が増えた。今回、自分たちが調べまとめたことを伝え合うことから外国に関心をもち、思ったことや考えたことを発言・発信していくという周りの人の役に立つための第一歩を踏み出すことができたと考える。実践を振り返り、今後の課題としては、高等部としての目指す姿を引き出すための総合的な学習の時間における指導の継続や工夫や、他の教科や授業場面における「感じる・考える・伝え合う」のテーマを受けた授業作りの実践、教師の支援や評価の在り方の探求が挙げられる。今後の授業を通じて、今回挙げられた課題についてさらなる授業づくりを研究し、実践を継続していきたい。

注

- 1) 文部科学省. 2009. 『特別支援学校 幼稚部教育要領 小学部・中学部学習指導要領 高等部学習指導要領』.
- 2) 文部科学省. 2009. 『高等学校学習指導要領』.

- 3) 廣木聡・渡邊鮎美・椎名幸由紀・東條吉邦. 2014. 『高等部総合的な学習の時間の取り組み①—学校オリジナルキャラクターの作成と活用—』(茨城大学教育学部附属教育実践総合センター).
- 4) 文部科学省. 2009. 『高等学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』.
- 5) 文部科学省. 2013. 『今, 求められる力を高める総合的な学習の時間の展開 (高等学校編)』.
- 6) 清水貞夫監修・三浦光哉編著. 2001. 『障害児教育の「総合的な学習の時間」～生活単元学習から「総合的な学習の時間」への転換～』(田研出版).
- 7) 三浦光哉・清水貞夫編著. 2003. 『特別支援教育の「総合的な学習の時間—実践撰集—』(田研出版).